

「源氏物語」での「けるかな」の用例の検討

—「詠嘆」の表現を考える一助として—

西田 隆 政

1 はじめに

西田(2012)では、近藤(1997)を参照しつつ、「源氏物語」での終助詞「かな」の用例を検討し、中古の和文において、いわゆる「詠嘆」¹の意味では解しがたい例のあることを指摘した。独話や心内での心情を吐露する例では基本的に「詠嘆」と理解しうるのであるが、対話の例では、「詠嘆」とは解しがたい例を多数見ることができた。

この「詠嘆」の問題を検討するにあたっては、助動詞「けり」に終助詞「かな」が下接する例(以下「けるかな」とする)が注意される。「けり」には「詠嘆」の意味を担う可能性があり、「かな」は「詠嘆」をしめす代表的な終助詞とされ、「詠嘆」の可能性のある語形が重ねて使用されているからである。

本稿では、「源氏物語」での「けるかな」の例を検討し、その上で、「詠嘆」がどのように表現されているのか、について、検討する。さらには、中古の和文における「詠嘆」の表現のあり方についても考える。

2 「けり」に下接する「かな」の用例

西田(2012)の調査では、「源氏物語」には終助詞「かな」が670例あり、そのうち和歌の例が85例、散文の例が585例であった。散文の例のうち、体言に下接する例が280例、活用語に下接する例が305例であった²。

この305例のうち、「けり」の使用されている例が58例ある。以下、その例を巻の順に列挙する³。

¹ 「詠嘆」の定義については、西田(2012)と同様に「情意の一つ。対象に対する認識の後に生じる情意の一つ」とする、山口・秋本(2001)による。

² 本稿での調査は上田英代・村上征勝・今西祐一郎・樺島忠夫・藤田真理・上田祐一『源氏物語語彙用例総索引付属語編』1~5(勉誠社1996)による。

³ 引用は阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男『新編日本古典文学全集源氏物語』1~6(小学館1994~1998)による。引用に際して稿者が下線を付した。

- (1) 心の中には、ただ、藤壺の御ありさまをたぐひなしと思ひきこえて、さやうならむ人をこそ見め、似る人なくもおはしけるかな、(桐壺①p.49 心)
- (2) また、さし過ぎたることなくものしたまひけるかなとありがたきにも、いとど胸ふたがる。(帚木①p.90 心)
- (3) 「似げなき親をもまうけたりけるかな。……」(帚木①p.96 会)
- (4) 「まだかやうなることをならはざりつるを、心づくしなることにもありけるかな。……」とのたまふ。(夕顔①p.159 会)
- (5) 「心恥づかしき人住むなる所にこそあなれ。あやしうも、あまりやつしけるかな。聞きもこそすれ」などのたまふ。(若紫①p.201 会)
- (6) 「こなたはあらはにやはべらむ。今日しも端におはしましけるかな。……」(若紫①p.208 会)
- (7) 我はさは男もうけてけり、この人々の男とてあるはみにくくこそあれ、我はかくをかしげに若き人をも持たりけるかな、(紅葉賀①p.322 心)
- (8) 深き秋のあはれまさりゆく風の音身にしみけるかな、(葵②p.51 心)
- (9) さまことにいみじうねびまさりたまひにけるかなとたぐひなくおぼえたまふに、(賢木②p.110 心)
- (10) 心ばせなべてならずもありけるかなと(明石②p.237 心)
- (11) ありしよりあはれに思して、あやしうもの思ふべき身にもありけるかなと思し乱る。(明石②p.263 心)
- (12) いとよしよししう気高きさまして、めざましうもありけるかなと見棄てがたく口惜しう思さる。(明石②p.264 心)
- (13) 「遊びなどもせず、昔聞きし物の音なども聞かで久しうなりにけるかな」とのたまはするに、(明石②p.274 会)
- (14) 「……、すきずきしきことにつけて、もの思ひの絶えずもはべりけるかな。……」(薄雲②p.459 会)
- (15) なほこの道はうしろやすく深き方のまさりけるかな、と思し知られたまふ。(薄雲② : p.464 心)
- (16) 「いときよらにねびまさりたまひにけるかな。……」(朝顔②p.471 会)
- (17) あさましくもあるかな、さればよ、思ひよらぬことにはあらねど、いはけなきほどにうちたゆみて、世はうきものにもありけるかな、と、けしきをつぶつぶと心得たまへど、(少女③p.39 心)
- (18) /さ夜中に友呼びわたる雁がねにうたて吹き添ふ荻のうは風/身にもしみるかなと思ひつづけて、(少女③p.49 心)

- (19) ほのかになど見たてまつるにも、容貌のまほならずもおはしけるかな、
かかる人をも人は思ひ棄てたまはざりけりなど、 (少女③p.67 心)
- (20) 舟子どもの荒々しき声にて、「うら悲しくも遠く来にけるかな」とうた
ふを聞くままに二人さし向かひて泣きけり。 (玉鬘③p.90 会)
- (21) 心幼くもかへりみせで出でにけるかなと、 (玉鬘③p.101 心)
- (22) 「親子の仲のかく年経たるたぐひあらしものを、契りつらくもありける
かな。……」 (玉鬘③p.130 会)
- (23) 「骨なくも聞こえおとしてけるかな。……」 (蛭③p.212 会)
- (24) 「かやうのことは御心に入らぬ筋にやと、月ごろ思ひおとしきこえける
かな。……」 (常夏③p.230 会)
- (25) 来し方行く末ありがたくもものしたまひけるかな、 (野分③p.269 心)
- (26) げに、うち思ひのままに聞こえてけるかなと思して、(野分③p.278 心)
- (27) 「尚侍あかば、なにがしこそ望まんと思ふを、非道にも思しかけるか
な」などのたまふに、 (行幸③p.321 会)
- (28) なかなかにもうち出でてけるかなと口惜しきに (藤袴③p.334 心)
- (29) 「いとまがまがしき筋にも思ひよりたまひけるかな。いたり深き御心な
らひならむかし。……」 (藤袴③p.337 会)
- (30) かしこくも思ひよりたまひけるかなとむくつけく思さる。
(藤袴③p.337 心)
- (31) いとあやしう、若々しき仲らひのやうに、ふすべ顔にてものしたまひけ
るかな、 (真木柱③p.376 心)
- (32) 「さて、世の人に似ず、あやしきことどもを見過ぐすここの年ごろ
の心ざしを、見知りたまはずありけるかな。……」 (真木柱③p.378 会)
- (33) 「さることをこそ聞きしか。情けなき人の御心にもありけるかな。……」
(梅枝③p.426 会)
- (34) 「手をいみじうも書きなられにけるかな」など (藤裏葉③p.442 会)
- (35) 別れけむ暁のことも夢の中に思し出でられぬを、口惜しくもありける
かなと思す。 (若菜上④p.108 心)
- (36) 「これよりおほけなき心は、いかがはあらむ。いとむくつけきことをも
思しよりけるかな。なにしに参りつらん」とはちぶく。(若菜下④p.220 会)
- (37) まして、これは、さま異に、おほけなき人の心にもありけるかな、
(若菜下 p.254 心)
- (38) 「……さすがになつかしきことの、かの人御なづらひにだにもあらざ

- りけるかな。……」 (若菜下④p.263 会)
- (39) 言ふかひなくもありけるかな、と (若菜下④p.281 心)
- (40) 「いでや、この煙ばかりこそはこの世の思ひ出ならめ。はかなくもありけるかな」と、 (柏木④p.296 会)
- (41) 「……、こよなう情なき人の御心にもはべりけるかな」と、つぶつぶと泣きたまふ。 (夕霧④p.436 会)
- (42) あはれにもありがたかりし御仲のさすがに契り深かりけるかなと思ひ出たまふ。 (夕霧④p.475 心)
- (43) そのをり、かの御身を惜しみきこえたまひし人の多くも亡せたまひにけるかな、後れ先だつほどなき世なりけりや、など、 (御法④p.514 心)
- (44) 「独り寝常よりもさびしかりつる世のさまかな。かくてもいとよく思ひ澄ましつべかりける世を、はかなくもかかづらひけるかな」とうちながめたまふ。 (幻④p.525 会)
- (45) また人よりことに口惜しき契りにもありけるかなと思ふこと絶えず、 (幻④p.525 心)
- (46) 「園に匂へる紅の、色にとられて香なん白き梅には劣れると言ふめるを、いとかしこくとり並べても咲きけるかな」とて、 (紅梅⑤p.50 会)
- (47) 「うたても答へをしてけるかな。書きかへでやりつらむよ」と苦しげに思して、ものものたはずなりぬ。 (竹河⑤p.91 心)
- (48) 「八の宮の、いとかしこく、内経の御才悟深くものしたまひけるかな。……」 (橋姫⑤p.128 会)
- (49) (50) 恥づかしくもありけるかなと疎ましく、かかる心ばへながらつれなくまめだちたまひけるかなと聞きたまふこと多かり。 (総角⑤p.236 心)
- (51) 思へば悔しくもありけるかな、 (総角⑤p.302 心)
- (52) 「……思ひの外なる御宿世にもおはしけるかな。……」 (総角⑤p.332 会)
- (53) 心の底のづしやかなるところはこよなくもおはしけるかな、 (宿木⑤p.384 心)
- (54) げに、憎くも書いてけるかなと、 (浮舟⑥p.154 心)
- (55) 「……いと不便にもはべりけるかな。……」 (手習⑥p.283 会)
- (56) いささかをかしきさまならずも生ひ出でにけるかなと、 (手習⑥p.302 心)
- (57) 「いときよげに、あらまほしくもねびまさりたまひにけるかな。……」 (手習⑥p.309 会)

(58) むつかしきこともしそめてけるかなと思ひて、 (手習⑥p.326 心)

上記の 58 例で、「源氏物語」での「かな」の散文中の活用語下接例の 19.0% となる。動詞に下接する例が 57 例、形容詞に下接する例が (42) 「深かりけるかな」の 1 例である。

これら 58 例でもっとも注意されるのは、情意的な意味の形容詞や形容動詞等の連用修飾語句のある例が (1) (2) (5) (6) (9) (10) (12) (13) (14) (16) (19) (20) (21) (22) (23) (25) (26) (27) (28) (30) (31) (32) (34) (35) (39) (40) (43) (44) (46) (47) (48) (49) (50) (51) (53) (54) (55) (56) (57) の 38 例と 60%以上見られることである。

これらは、近藤 (1997) での情意・評価の形容詞や形容動詞が連用修飾する例に該当し、さらに 38 例中の 30 例に係助詞「も」が使用されることでより情意が強められる例となっている。また、その他の例も、全て (3) 「似げなき親をも」の対格や (8) 「深き秋のあはれまさりゆく風の」の主格等のそれぞれに情意的な意味の連体修飾がある例である。これは、近藤 (1997) で句全体に情意や評価を示している要素のある例に該当する。以上の点からすると、「けるかな」は、情意的な語句と共起する例でのみ使用されるということになる。

使用文体では、会話文 26 例と心内文 32 例である。会話文では、(3) で光源氏が紀伊守の発言を批評するように、対話での相手の言動への働きかけで使用される。また、心内文では、(1) で光源氏が藤壺への賛美をしめすように、心内での心情の吐露においても使用される。これらは、西田 (2012) で指摘した傾向に合致するものである。

また、和歌での例が 11 例ある。以下の (59) から (69) に掲出する。

(59) 逢ふまでの形見ばかりと見しほどにひたすら袖の朽ちにけるかな
(夕顔①p.195)

(60) くやしくもかざしけるかな名のみして人だのめなる草葉ばかりを
(葵②p.30)

(61) あやなくも隔てけるかな夜を重ねさすがに馴れし夜の衣を (葵②p.71)

(62) 生ける世の別れを知らで契りつつ命を人にかぎりけるかな
(須磨②p.186)

(63) 心から常世をすててなく雁を雲のよそにも思ひけるかな (須磨②p.202)

(64) うらなくも思ひけるかな契りしを松より波は越えじものぞと

(明石②p.260)

(65) なにとかや今日のかざしよかつ見つつおぼめくまでもなりにけるかな

(藤裏葉③p.448)

(66) 目に近く移ればかはる世の中を行く末とほくたのみけるかな

(若菜上④p.65)

(67) 山桜にほふあたりにたづねきておなじかざしを折りけるかな

(椎本⑤p.175)

(68) 立ち寄らむ蔭とたのみし椎が本むなしき床になりにけるかな

(椎本⑤p.212)

(69) 波こゆるころとも知らず末の松待つらむとのみ思ひけるかな

(浮舟⑥p.177)

これらも、情意的な連用修飾の語句の使用される例や主格や対格に情意的な連体修飾のある例である。いずれも自らの心情を吐露する例となっている。

3 「かな」と「けるかな」の相違点

「けるかな」を検討する際には、「けり」の使用されない「かな」だけの例との相違が注意される。(17)では、一連の心内文の中に、「かな」と「けるかな」が使用される。

(17)は、内大臣が夕霧と自分の娘雲居の雁が恋仲であることを知らされ、穏やかでない心境を心内で思考する例である。まず、「あさましくもあるかな」で、予想もしなかった二人の恋仲で「困惑すべき状況であるな」と「詠嘆」の意味となる。一方、「世はうきものにもありけるかな」では、雲井の雁を入内させようとしていた計画も無理となり、世のうきものであることに「気づき」、さらにはそれを「そういうものだな」とする「詠嘆」の意味となる。「けり」の担う意味と「かな」の担う意味とが、ともに表現されていることになる。

この例からすると、「かな」と「けるかな」が相違する事態をしめす表現であることは、明らかである。単にその時点での「詠嘆」の意味と「気づき」を踏まえた上での「詠嘆」の意味とでは、別の表現と見なすべきである。

つづいて、「けるかな」と「けり」の相違点について検討する。(46)の「咲けるかな」は、匂宮が独白のように、「紅梅も白梅も見事に二つ劣らず並んで

咲いたものだな」と、その様子を改めて「気づい」て⁴感慨にふけるという「詠嘆」意味となる。それに対して、次の(70)は、幼少の匂宮が「僕の桜は咲いた」と「気づい」た事態を光源氏に報告する会話文である。

(70) 若宮、「まろが桜は咲きにけり。いかで久く散らさじ。木のめぐりに帳を立てて、帷子を上げずは、風もえ吹き寄せらじ」と、 (幻④p.529 会)

(70)は、「僕の桜は咲いた」となる典型的な主語述語対応の述語文である。係助詞「は」を使用して、事態を二項対立で説明している。それに対して、(46)は、「見事に二つ並んで咲いたものだな」と、事態を説明的に捉えるのではなく、その事態の見事さを賞賛し「詠嘆」するのに主眼がある。

「けるかな」の例では、「けり」が使用されるものの、「かな」の下接しない大部分の「けり」の例とは、その使用傾向が相違することになる。これは、小田(2006)の指摘する終助詞での係り結びの使用制限の問題に通じる。

小田(2006)では、係り結びの文で使用される終助詞は「や」「かし」に限定され、一部「な」「よ」の例があるとする(pp.235-251)。「かな」が係り結びで使用されないのは、喚体文で使用されるものでもあり、当然のことともいえる。しかし、「けるかな」は述語の活用語に下接して使用されるものであり、近藤(1997)の指摘するように「かな」にも「一は一述語+かな」で構成される「解説説明」ともいえる例が存在する。

ところが、「けるかな」の例では、係助詞「は」が使用される例が69例中(7)(15)(17)の3例しか見られない。ただし、これらの3例も、(7)の「かくをかしげに若き人」、(15)の「うしろやすく深き方」、(17)の「うきものにも」の情意・評価を示す連体修飾のある語句と共起するものである。表現の中心は、主語述語による説明よりも、情意を示す語句にあると考えられる。

しかし、「けり」は、阪倉(1993)にも指摘されるように、係助詞との係り結びの結びとなることがおおく、とくに、地の文での物語の「語り」を担う文などでは物語の展開を説明するものであり、その傾向が顕著である。それゆえ、「けるかな」での「けり」は、それとは相違する使用法ということにもなる。そして、その際の「けり」は「詠嘆」を担う「かな」との親和性がつよい可能

⁴ 鈴木(2012)の定義では「再認識」となりうる例である。同書では「ケリ形態」の意味を、思い至り、再認識、気づき、言及の4種とする(pp.105-111)。

性がある。

次章では、その点をさらに検討するために、「けり」が持つともされる「詠嘆」の意味について考えてみたい。

4 助動詞「けり」の「詠嘆」から考える

「けり」の「詠嘆」説については、井島（2011）でその研究史が検討されている⁵。井島（2011）は、「けり」に「詠嘆」を認める説と認めない説があるものの、「気づき」の意味から派生した「詠嘆」を「けり」自体の持つ意味と認めるかどうかの相違であり、「“詠嘆”という概念の規定のしかたによるところが大きい」（p.394）のであって、「“詠嘆”と呼ばれるムード的意味を、より限定的に“気づき”と呼べば」（p.394）本質的な差異はないものとする。

糸井（2011）は、自身を「「気づき」説に立っている」（p.180）として、「「気づき」の対象となった事態には、自ずと時間の経過が伴っているとも言える。「詠嘆」と捉えたいくなるのは、「気づき」という認識に文脈的に醸成されてくる部分があるからである」（p.181）とする。「けり」の「詠嘆」は、「けり」の本質である「気づき」から生じるもの（p.180）と捉えている。

藤井（2012）は、「「けり」に詠嘆という意味はない。しかし、急いで付け加える。「けり」に詠嘆の気持ちが出てくる場合がまったくないわけではない」（p.164）とする。「一般に、言語は、実際に行われる会話の表現の現場で、感慨深く吐き出されることがある。それにいちいち詠嘆の用法を認めるのはどうだろうか」（p.164）として、終助詞「な」の下接した「けりな」や係り結びでの結びの「ける」や「なりけり」の使用された「百人一首」所収の「古今和歌集」の例を挙げ、これらはいずれも「けり」以外の要素によって「詠嘆のきもちをにじみ出させている」（p.165）とする。

藤井（2012）の「けり」の「詠嘆」の捉え方は、妥当なものと考えられる。井島（2011）にも通じるものであり、糸井（2011）の「気づき」から「けり」を考える立場とも矛盾するところはない。

しかし、藤井（2012）の「詠嘆」の捉え方をさらに進めると、一つの問題点が浮かび上がることになる。

⁵ 鈴木（1999）でも「けり」の「詠嘆」の研究史が検討されている（pp.258-259）。基本的な見解は井島（2011）に通じるものである。

(72) 終助辞や間投助辞によって、詠嘆は引き受けられているので、「けり」じたいは前述した「けりな」とか、別に「けるかも、けるかな、けるよ、けるは」など、併用されるところを見ると、「けり」そのものにむしろ「詠嘆の意味」はない、本来なかった、と見るべきではないか。詠嘆のようなきもちを引き受けるのは助辞の得意とするところ、特権だと見たい。

(藤井 2012,p.167)

「併用」が可能なのであるから「けり」ではなく「助辞」に「詠嘆」があるとするのは、合理的な捉え方である。しかし、その一方で、「けり」は「助辞」と併用しなくとも「詠嘆」を「にじみ出す」ことは十分に可能とされる。

とすると、「詠嘆」を表現する際に、「かな」等の「助辞」は必須要素ではない、という可能性も想定される。「けるかな」の例では「助辞」がなくとも「けり」だけで「詠嘆」を表現しうることになる。そうすると、「かな」や「な」等の「助辞」が「詠嘆」の表現においてどのような役割を担うのであろうか。

先の3章で検討したように、「かな」を使用する例がその文の意味として「詠嘆」を表現しているのは明らかである。それからすると、藤井(2012)の挙げた「古今和歌集」303番の「山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり」(p.165)の「けり」が「感慨をにじみ出させる」(p.166)ように和歌そのものの意味として「詠嘆」を表現しているのも同様のことといえる。

「かな」は確かに「詠嘆」の例で使用されることが多い。しかし、全ての例が「詠嘆」となるわけではない。この点では、3章でも触れた、近藤(1997)の指摘する「解説説明」の「かな」が重要な例となる。

(71) 「ここにもものしたまふは誰にか。尋ねきこえまほしき夢を見たまへしかな。今日なむ思ひあはせつる」(若紫①p.212 会)

(72) 「……なべて、世にわづらはしきことさへはべりし後、さまざまに思ひたまへ集めしかな。いかで片はしをだに」(朝顔②p.474 会)

(71) (72)は、いずれも過去の事態を聞き手に「解説説明」する例である。(71)は光源氏が昼間に垣間見た少女(若紫)の名を尋ねる理由を説明し、(72)では光源氏が朝顔の姫君に自身の心情を訴える際に自らのこれまでの諸事情を説明する。これらの例には、情意や評価に関わる修飾語句は使用されず、2章に挙げた「けるかな」の多くの例とは様相を異にする。

それゆえ、「かな」が使用されれば即「詠嘆」の意味となるのではなく、どのような語と共起し、どのような文構造や文脈で使用されるのかで、それぞれの例での意味が決定されるとすべきではなかろうか。「かな」そのものは、話し手の何らかの「情意的な確認」の意味と解す可能性もあるのである。

5 おわりに

本稿では、「源氏物語」の「けるかな」の用例の検討から、「けるかな」の「けり」が情意的な語句とともに使用されるという点でいわゆる「語りのけり」とは相違する、「かな」が使用されれば即「詠嘆」となるのではないという、2点について述べた。「詠嘆」の意味は「かな」と他の語句との共起関係や使用状況により表現されるということにもなる。

中古の和文での「詠嘆」の表現という点からすると、特定の終助詞等により表現されるというものではなく、他の語句と共起等の様々な条件が満たされたときに、「詠嘆」と理解されるとすべきではなかろうか。この点については、終助詞の問題とともに、さらに検討すすめる予定である。

[参考文献]

- 井島正博 2011『中古語過去・完了表現の研究』ひつじ書房
糸井通浩 2011「藤井貞和著『日本語と時間—<時の文法>をたどる』『古代文学研究会第二次』20
小田勝 2006『古代語構文の研究』おうふう
近藤要司 1997「『源氏物語』の助詞カナについて」『金蘭短期大学研究誌』28
阪倉篤義 1993『日本語表現の流れ』岩波書店
鈴木泰 1999『改訂版古代日本語動詞のテンスとアスペクト—源氏物語の分析—』ひつじ書房（初版はひつじ書房 1992）
鈴木泰 2009『古代日本語時間表現の形態的研究』ひつじ書房
鈴木泰 2012『語形対照古典日本語の時間表現』笠間書院
高山善行 2002『日本語モダリティの史的研究』ひつじ書房
藤井貞和 2012『文法的詩学』笠間書院
山口秋穂・秋本守英 2001『日本語文法大辞典』明治書院
西田隆政 2012「「詠嘆」の終助詞「かな」再考—「源氏物語」を資料として—」『武蔵野文学』60